

氏名(本籍)	^{たき} 瀧 ^{ざわ} 澤 ^{ふみ} 文 ^お 雄 (長野県)
学位の種類	博士(体育科学)
学位記番号	博乙第911号
学位授与年月日	平成5年7月31日
学位授与の要件	学位規則第5条第2項該当
審査研究科	体育科学研究科
学位論文題目	「【身体】の論理」研究—身体運動の現象学的究明—
主査	筑波大学教授 教育学博士 片岡 暁 夫
副査	筑波大学教授 教育学博士 成田 十次郎
副査	筑波大学助教授 教育学博士 松村 和 則
副査	筑波大学助教授 新井 保 幸
副査	筑波大学教授 医学博士 佐々木 雄 二
副査	筑波大学教授 教育学博士 草 薙 進 郎

論 文 の 要 旨

本論文は、序論、本論第7章、結論、および付論からなり、296ページ（1ページあたり1200字で、400字原稿用紙約788枚に相当する）より構成されている。

本論文は、身体運動の練習をする実践者の主体の立場に立つ時に現れる身体の論理を現象学的に究明するとともに、実践者を直接指導する体育指導者の指導方法の改善に寄与することを目的とした体育学的研究である。

「序論」では、まず、問題の所在が明らかにされる。運動の学習者が、人間の運動を生じさせているからだの働きを単に科学的客観的に説明されただけでは運動実現ができないという事実認識にもとづいて、運動実行の主体が運動を理解することが必要であることが導かれる。そしてこの了解可能性を支配するからだの論理の究明が体育学の重要課題であり、従来、実際の運動指導の場面でもこの論理に適した指導が存在したにもかかわらず、この論理自体が明確に自覚されていなかったところに研究問題をみいだしている。そして、からだを分析して、人間の【身体】を研究対象として設定している。これは、物体としての肉体、それをとりまいて運動を可能にする身体、さらにそれをとりまく精神・情緒からなる統一として説明される。

本論の「第1章 身体論—先行研究についての批判検討—」では、まず体育学における身体論が日本および欧米の論者について検討され、心身一如の人間把握が主張されているが、体育実践を指導できる内容ではないと批判される（第1節）。次いで哲学における身体論が検討される。一般に心身二

元論の克服にその研究課題をもち、なかでも現象学的身体論において、体育実践を指導する方向が示唆されるが、体育的には明確になっていない（第2節）。さらに教育実践や芸道論における身体論が検討されるが、結局のところここに焦点があり、体育とは立場を異にする（第3節）。

「第2章 現象学的方法—先行研究についての批判検討—」では、まず体育学研究における現象学的方法を用いた先行研究が検討される。紹介と引用に留まり体育学の方法として十分に吟味されていないことが明らかにされる（第1節）。この吟味のためにフッサールが検討され（第2節）、現象学的方法が抽出され、体育学で使用可能になるように改編される。すなわち、運動体験についての判断中止、知覚作用と知覚対象との相互的分析、外界と主体のそれぞれの地平の分析対象化、分析対象についての現象学的記述、そして形相的還元である（第3節）。

「第3章 【からだ】についての意識」では、まず物としての【からだ】と地平としての【身体】の視点の区別がなされる（第1節）。ついで身体運動についての意識と【身体】についての意識の区別がなされる（第2節）。さらに【身体】の対象化が論じられ、「【からだ】を持つ」と「【からだ】である」との区別がなされ、「『【からだ】である』を持つ」と対象化される（第3節）。

「第4章 【身体】の構造化」では、まず【身体】が構造であることが論じられる（第1節）。このことに基づいて、【身体】の構造化の過程が、再構造化、構造化の順序性、洗練化と尖鋭化の視点から明らかにされる（第2節）。

「第5章 構造化に不可欠な【下位動作】」では、構造化を成立させる知覚内容を論じ、知覚と【動作】の関係が、知覚の概念の明確化、知覚の論理、および身体運動における知覚の検討から導かれる（第1節）。そして動作と【下位動作】の関係が、既存の動覚概念の批判的検討および動作をつくりだす【下位動作】の検討によって明らかにされる（第2節）。

「第6章 枠組みとしての身体的時空間」では、まず、客観的時空間と運動主体に必要な身体的時空間の区別がなされる（第1節）。ついで、運動主体に必要な身体的時間性が、時間論の検討、および身体的時間性の検討によって明らかにされる（第2節）。つぎに運動主体に必要な身体的空間性が、身体空間と身体的空間との関係の検討、および身体空間と身体的空間それぞれの検討で明らかにされる（第3節）。そして最後に身体的時空間の生成について論じられる（第4節）。

「第7章 身体運動に不可欠な身体的思考」では、まず、なぜ身体的思考が必要なのかについて論じられる（第1節）。ついで、身体的思考の意識化について、身体的思考を意識する必要性、身体的対話、身体的判断、身体的記憶、身体的思考の目的の各視点から論じられる（第2節）。この身体的思考に関わる言語使用と運動習得の関係が、言語と【下位動作】の関係および運動習得に必要な言語使用の検討から明らかにされる（第3節）。

「結論」では、論文の全体的要約（第1節）、ついで、【身体】の論理を重視した指導への考察（第2節）、そして、体育学における現象学的方法の確立への展望と【身体】の論理からの体育学の体系化への展望がなされる（第3節）。

「付論 【【身体】の論理】からみた器械運動」では、【身体】の論理から運動実践を据え直すための具体的な例として、器械運動について考察している。まず、器械運動のさまざまな種目の相互関連

がみいだされる。そして器械運動全体に共通する物としての運動と動きを作る【身体】との関係が明らかにされ、ついで種目間の連関が明らかにされる（第1節）。さらに器械運動の【下位動作】が検討され、物になること、身体運動を作ること、そして実践例として「側方倒立回転の指導」が提示される（第2節）。最後に、指導の場面での運動補助者にとって【身体】の論理を理解することが要件であると結ばれている（結論）。

審 査 の 要 旨

本論文は、千葉大学教育学部において、体育の専門の学生に器械運動の指導と研究を担当している著者の長年の実践に裏づけられた研究の成果をまとめたものである。体育の科学的指導ということが叫ばれてから久しいが、反面では科学の諸分野に体育学が分裂し、単なる諸学問の集合場所に過ぎず、体育学のアイデンティティをどこに求めるかという議論が世界的に問題とされるようになっている。このような状況において著者の研究は、体育学の存在の根拠を実践指導における運動主体にみいだした。これは、体育の指導者でもあるという著者の強い動機によって支えられている。

研究課題の解明にあたり、著者のとった現象学的手法は、通常の科学的思考方法に慣れたものにとって、それを組み直し、新しい視点を確立するための現象学的還元を努力を要求するものである。このことが、先行研究の検討のなかで、視点を失うことなく著者によって遂行されたことは、本論文の価値であり体育の指導者にとっても価値が高い。また先行研究の批判は適切である。論文の記述は論理的であり、かつ体系的あり、概ね妥当であるといえよう。

体育学における現象学的な研究は世界的にみると未開拓な分野である。そして心理学的な立場にたつ運動学習論が実践のプログラムを提供できるところまで具体的でないので、主体の立場に立つ著者の方法は、運動指導論において、今後の発展が期待される。本研究は身体の論理に限定されており、まだ身体運動の論理までは展開されていない。基礎的な段階を超えて、さらに現実の身体運動の論理へと展開することが今後の課題であろう。その段階に至るときに、社会の現実の中に位置づけられた体育の指導が可能になるであろう。

以上のような残された問題はあっても、全体として本論文は体育運動の基礎となる身体の論理を体育現象学的に究明することによって、体育学に新たな方法と知見を示し、論文の課題解明に成功しているといえる。

よって、著者は博士（体育科学）の学位を受けるに十分な資格を有するものと認める。